

# 注連縄にみる伝承形態の調査研究 (I)

—九州地方—

## A Study of Traditional Form “Shimenawa”

—in Kyushu Area—

佐藤 武郎 河野 公記

### まえがき

いま日本人の生活様式は和洋折衷、日本的文化と西洋的文化の混合により成立している。古い伝統的習慣が崩壊して行くなかで、日本人の精神の底流に生きる農耕民族の証、その一つに正月の「シメ飾」＝「注連縄」がある。注連にみる素朴さや不思議な力強さは時代に涵養した民間伝承による造形物であり、デザイン発想の原点を垣間見るものがある。そこでこの様相美を再見すべく各地の注連縄を収集し形態の変化を調査考察することにした。

今日一つのデザインを人が要求する場合、その制作は専門家の手を介在する。専門家とは社会における一職能であるから、デザインする行為はデザイナー個人の必要性とは関係なく人の欲求を満足せしめるために合目的に機能性や審美性、経済性等を踏まえて計画し、他の分野との共同作業により具現化ならしめている。注連縄においては制作者は農民であり、造形思考においても制作プロセスにおいてもデザイナーの場合と異なる。つまり注連縄の制作目的は物品ではない。単的にいえば「常民の精神的安定という機能をもったシンボルであり、作者と受け手が同一という立場で発生した」。もちろん現代われわれは注連縄を自家用に自作するわけではないので現在の注連縄は商品といえるが、日常の必需品とは目的も価値観も同一の見方をすることはできないのである。

本論で取り上げた民家の注連縄について考察してみよう。正月には米作りの神が降臨するわけであるから正月を迎えるために古くは「年男」＝(主人)が注連縄を自家用に縋って戸口や神棚等に張りわたした。注連縄の材質は清浄なイネ藁である。イネは米の母体であり、米作は自然の恵みと人の汗の結晶である。この意味からイネ

藁をもって注連縄の造形材料として来たことは「豊穰のシンボル」という観点からみて非常に適切な素材であるといえる。また「縋う」という技術は農作業の道具の一つである「縄」を作ることに関係して密であり、農民の日常的技術として欠かせざるものである。これが「神を迎える」とか「豊穰を祈る」という気持、つまり精神的高揚と日常的技術の基盤が結びついて「注連縄」という造形を発生せしめたものと考察したい。

注連縄の形態における礎形は藁だけを縋ったものであるが通常風土的慣習により礎形に種々の飾りが付帯されている。これは縁起の良い語呂によせて正月のメ飾り<sup>(1)</sup>つまり裏白、譲葉、熨斗、橙、昆布、木炭、海老、などの他に御幣、折紙などである。挿図のa群は収集時の状態であり、各地の現状写真である。b群ではデザインの見地から礎形美をみるために飾りや付属品を取り却ったものである。またb群の2, 3…という記号は礎形のヴァリエーションであり、形態の様式が類似していても制作者が異ると礎形に多少の変化がみられることを示す。この結果、個々の注連縄の形態をすべて優れた芸術品とまではみないが、時代を濾過したところの「神化のフォルム」として非常に洗練されたものがありオブジェとしてみたい。

注連縄の形態の様式を大別すると民俗学では輪ジメ、牛蒡ジメ、一文字ジメ、板ジメの四種に分類されている。しかしながら一文字ジメと牛蒡ジメの形態的相違について明確な規定はなされていない。したがって本論は各地の形態を可能な限りにおいて収集し、その形態の変化を見ることに主眼をおいたものである。

### II 注連縄に関する歴史的背景

これまで、民族学的立場からの資料を紐解くまでもな

く、注連縄は神のいます聖域を示すための、いわば縄張りともみるのが定説であり、それは最古の文献としての古事記における天の岩戸にまつわる茅の輪にもうかがえ、またその原型は伊勢神宮の「磯城」<sup>(2)</sup>にもよりどころを識ることが出来るとされる。また注連縄が正月の飾りとして用いられるようになったのは、藤原期からとされ、改たまる年を祝って、注連縄を門戸に張り、悪や汚れを、神聖な場から隔離する意味をもつものでもあった。それは農耕民族の証ともいふべきもので、その伝承は信仰に帰結する祈りの形式とみてもよい。注連縄の形成は真新しい藁を左にないながらしめのことといわれる、藁の端を、三筋、五筋、七筋づつまとめて数節づつ、一定の間隔をおいて数ヶ所出してゆく。また、七五三縄と書きシメナワ<sup>(3)</sup>という。そのしめのこの間に四手をはさむ。四手は「垂ず」の連用形とされる。この四手は、神事における、神前に供する幣串や、注連縄などに垂れ下げ、清浄の場で在ることを意味する標識としての紙片でもある。この四手も藤原期以後は木綿を使用した<sup>(4)</sup>が、江戸期から紙片に変わり今日に至る。四手の他に、江戸末には縁起物の歯朶、ゆずり葉、橙などを加飾するようになるが、いづれも目出度さにあやかるのは、清浄に関連する潔癖さと吉祥に通ずる国民性のためであろうか。

民族学では注連縄の特質について「シメ」とはタブーであるという<sup>(4)</sup>。つまり注連縄の張り渡された区域は清浄な空間を保つことにある。神を迎える場所として外からの侵犯を断つものである。さらに「標縄」＝「シメナワ」というごときは明らかに「サイン」を意味すると考察されるが、これは神社や神事で用いられるところの注連縄である。他方本論で扱う注連縄は「祈」とか「祝」の機能を含有した民間で飾るところの注連縄であり、これは戸口や神棚に掛けるものである。したがってデザインの観点から考察すると前者の注連縄は「サイン」としての造形物であり、後者は「シンボル」としての要素が濃厚で正月における代表的な民間の伝承形態であるといえる。

### III 研究目的

正月の「シメ飾り」＝「注連縄」をデザインの見地より調査分析し、注連縄のもつ造形的様相美の再見を目的とする。

### IV 調査研究の手続

1. 九州地方（福岡県、佐賀県、長崎県、熊本県、鹿児島県、宮崎県、大分県）において一般家庭で飾る注連縄。

### 2. 調査期間

1974年～1976年(各年とも12月25日～12月31日まで)

### 3. 収集の手続

各地に出向して収集を行った。

### 4. 写真による形態の記録

5. 注連縄の付属物(飾り)を除去した基本体(礎形)の構造分析。

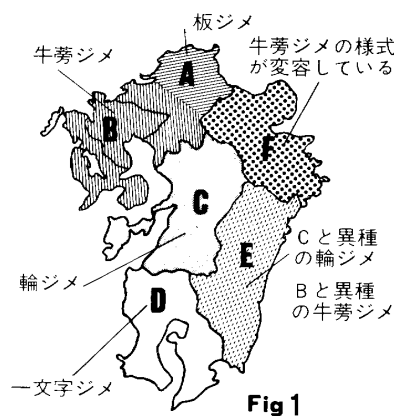


Fig 1

## V 結果と考察

地域別に考察をすすめるが、挿図※印は各地域の代表的(主流をなす)形態である。本研究で分類上使用する用語は民族学で用いられているものである。Fig 1におけるA, B, C, D, E, F, の記号は調査の結果形態を大分類したものであり、北九州地方を除き各県において異種の形態を伝承していることが明確になった。

### 1. 福岡県(板シメ、牛蒡シメ) Fig 1-A・B

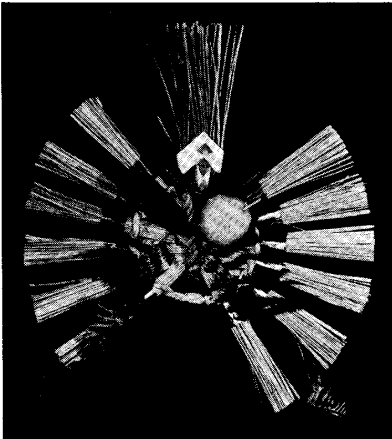
福岡県の北部では Fig 2-a の注連縄で様式は板シメ、門司で大分県と非常に類似した様式の注連縄をみたが主流は Fig 2-a である。Fig 2-b はその礎形であり放射状の四手が美しい。Fig 3-a・b は香椎で収集したものである。Fig 4-a・b は雁巣で Fig 5 は志賀島で収集した。Fig 6 の牛蒡シメ(シメが太いため共同研究者間では大根シメとよんでいる)であるが、これは博多以南で主流をなす。Fig 7 は太宰府付近で収集したがこの様式は一般にみられる様式で注連縄の原流をなす形態と思われる。この地域の付属物(飾り)は譲り葉、だいたい、裏白、熨斗である。

### 2. 佐賀県(牛蒡シメ) Fig 1-B

佐賀県は Fig 6 が主流でわずかに Fig 10 の神棚に使用する輪シメの素朴なものをみるに止まった。

### 3. 長崎県(牛蒡シメ) Fig 1-B

長崎県の注連縄の主流は Fig 6 であるが Fig 6-b をベースとして福岡県、佐賀県、長崎県は共通し



福岡県※Fig 2-a

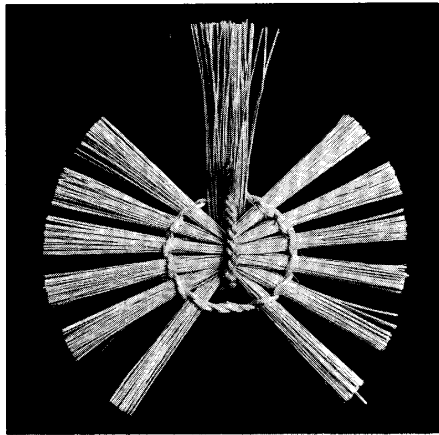


Fig 2-b



福岡県※Fig 3-a

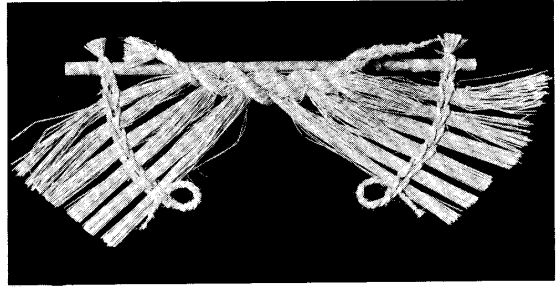
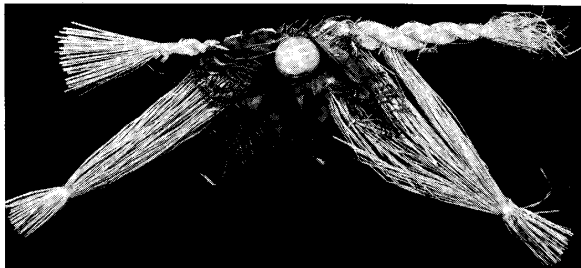


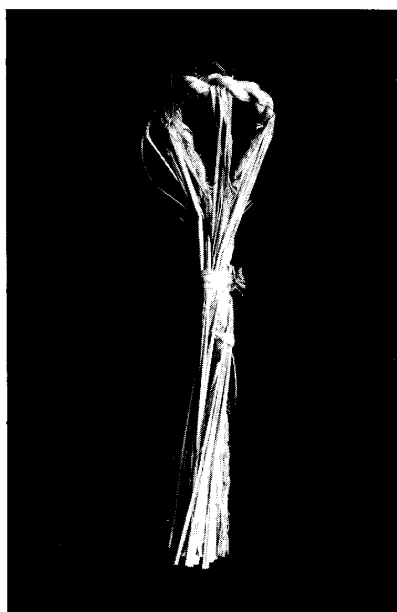
Fig 3-b



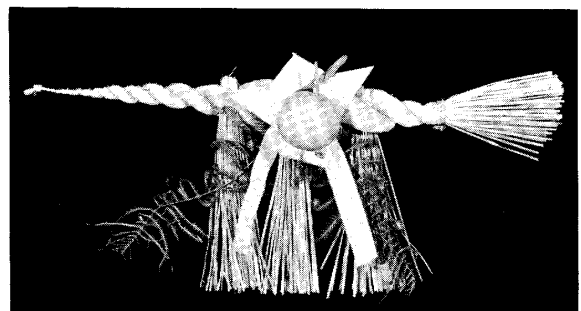
福岡県 Fig 4-a



Fig 4-b



福岡県 Fig 5



福岡県、佐賀県、長崎県 ※Fig 6-a

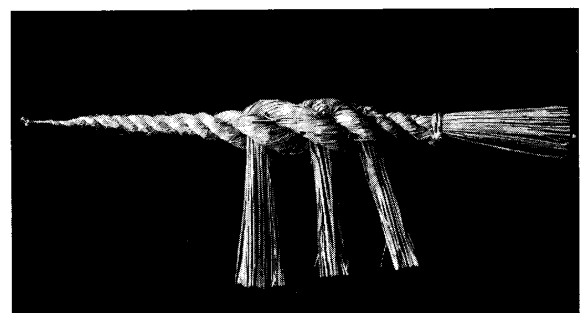
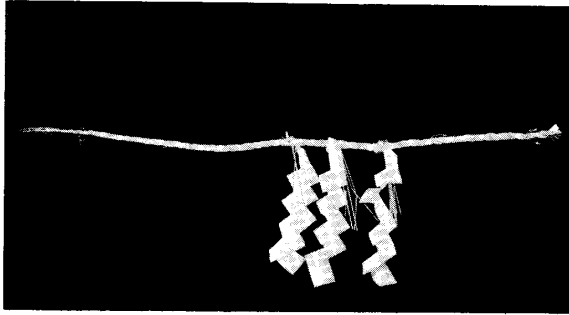
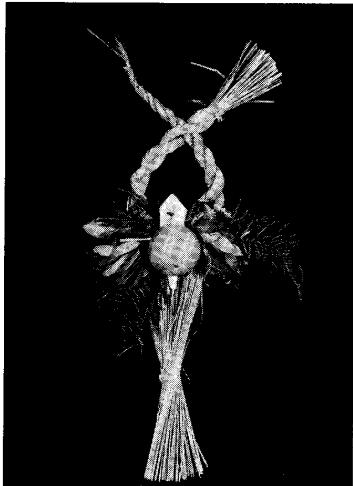


Fig 6-b



福岡県、長崎県 Fig 7



長崎県 Fig 8 - a

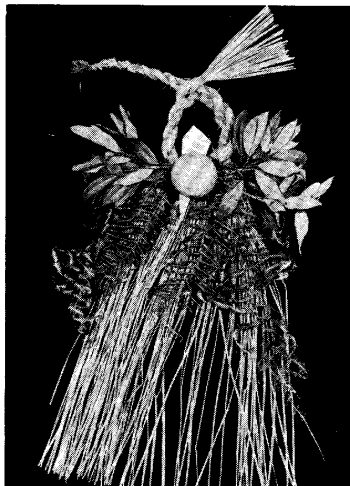


Fig 8 - a - 2

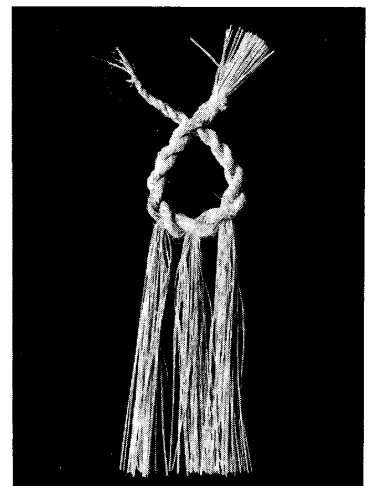
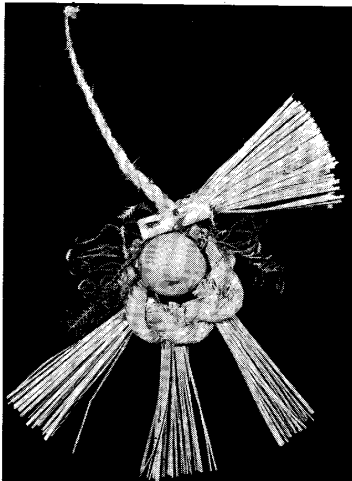


Fig 8 - b



※長崎県 Fig 9 - a

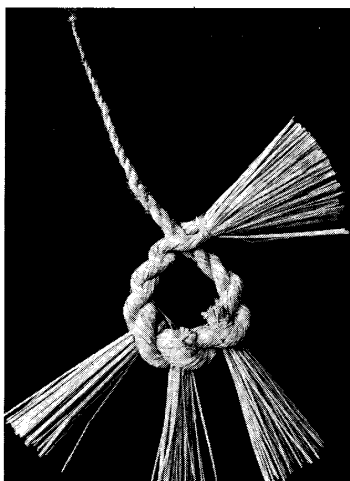
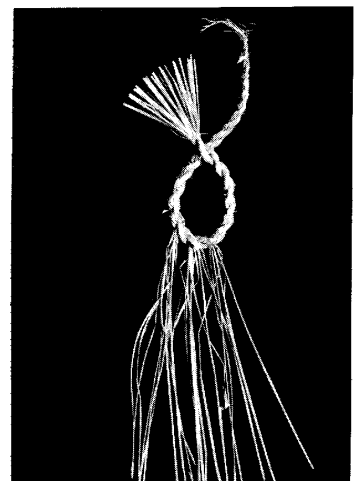
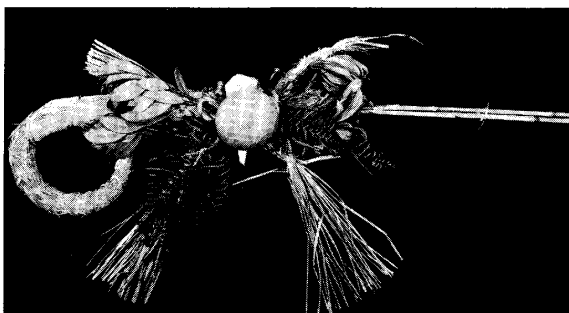


Fig 9 - b



佐賀県 Fig10



長崎県 Fig11 - a

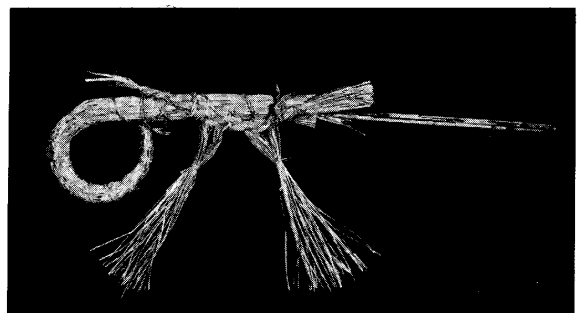
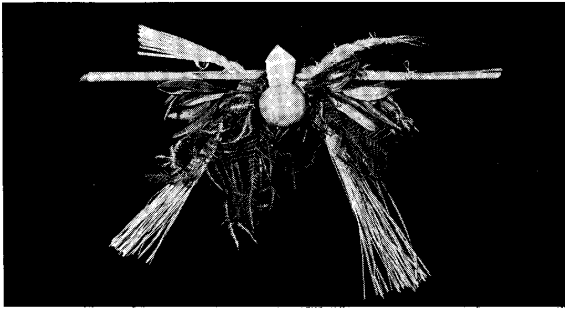


Fig11 - b



長崎県 Fig12-a

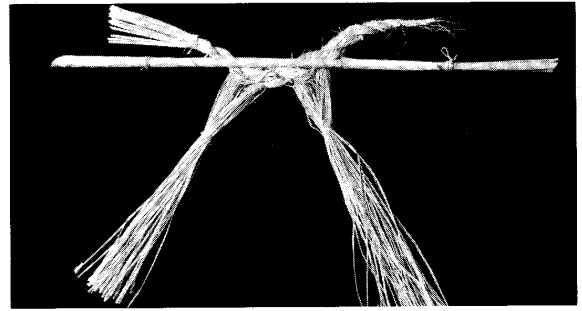
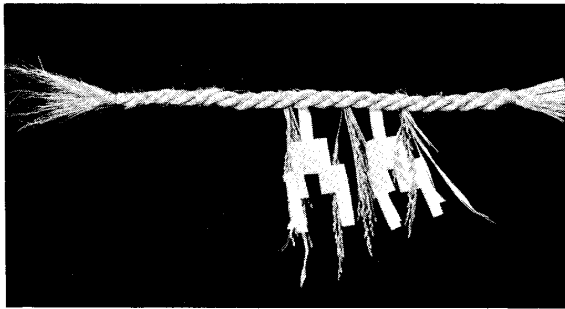


Fig12-b



長崎県 Fig13-a

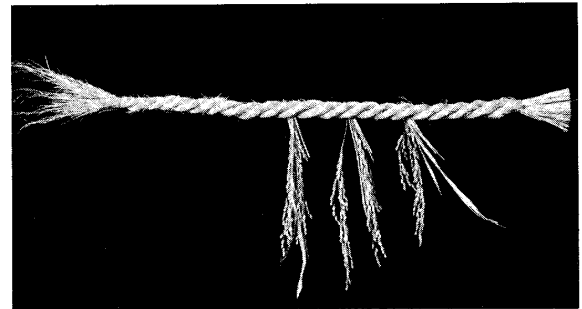
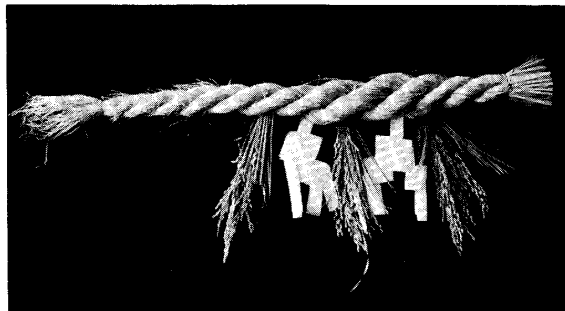


Fig13-b



長崎県 Fig14-a



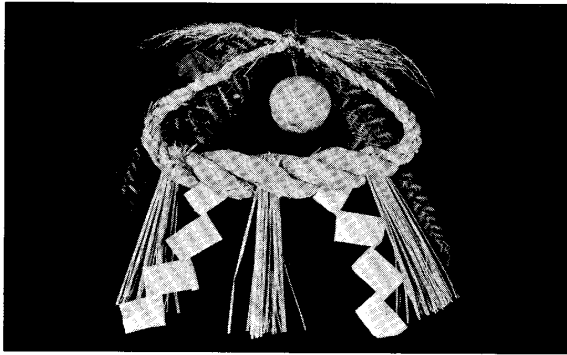
Fig14-b

た様式である。Fig 8は平戸で収集したものであるが Fig 8-a-2の様に变化した四手があり、Fig 8-bの礎形でみるように輪ジメである。他に Fig 11-a・bがあり、これは鉄砲のフォルムが導入されたものであろう。キリシタンの歴史を彷彿するような形態であるがシメの技術は甘い。Fig12-a・bは同じ平戸市内で収集したものであるが荒神用の注連繩である。Fig 9-a・bは長崎県佐世保市のものである。シメが堅く力強いフォルムをみせている。付属の飾りに熨斗でくるんだ木炭が付帯されている。この県では譲り葉を使用した注連繩と御幣だけのものと二種に分けられる。長崎市内では Fig 6-a・bである。島原では Fig13-a・b、Fig 14-a・bの注連繩を収集した。この2点は素朴で清楚な牛蒡ジメであり、稲穂と御幣が神々しく、シメが見ごとに飾りと調和した造形美を形成している。しかし街中の朝市ではこの様式の注連繩でなく、佐

世保、長崎市の形態と同様であり、Fig13・14は貴重な収集であった。

#### 4. 熊本県（輪ジメ）Fig 1-C

熊本県の注連繩は輪ジメで統一されている。Fig 15 a・bをスタンダードに礎形 bは Fig15-b-2・3と地域によって多少変化をみる。Fig16は1975年の調査時に天草、有明町で収集したものである。しかし、この注連繩は収集時の前年に制作したものであった。様式に特殊なものがあり、注連繩の上部にキリシタンのシンボルが認められ形態に、この地方の歴史の様相をみるがすでに廃絶した様式とみた。Fig15の飾りは少し乱れたものであるが熊本県は裏白、だいたい、御幣の三種の付属品である。Fig17は福岡県太宰府付近で収集したが熊本県北部で制作されたという。



熊本県※Fig15-a

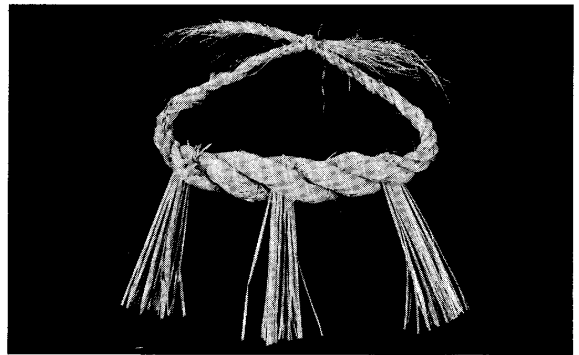


Fig15-b



熊本県 Fig16

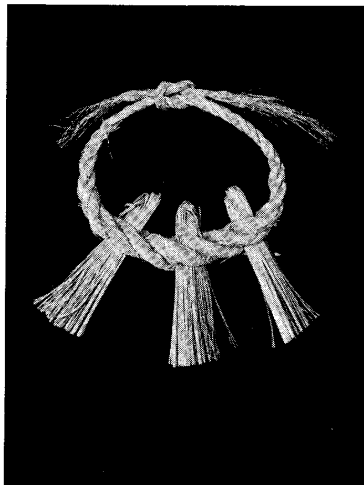


Fig15-b-2

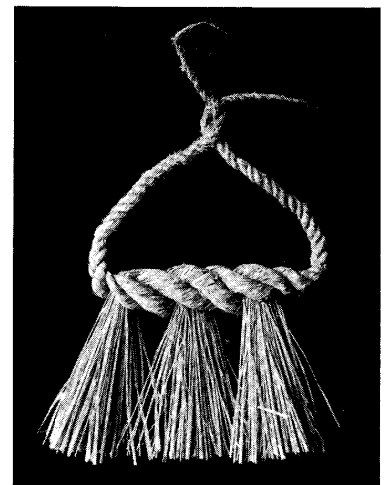
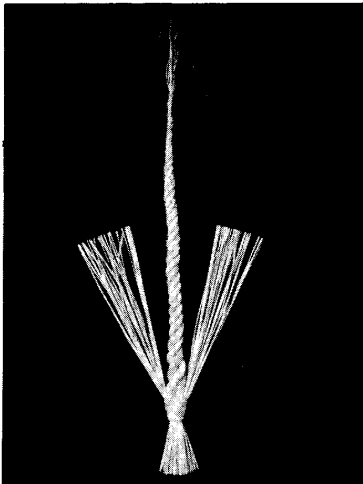


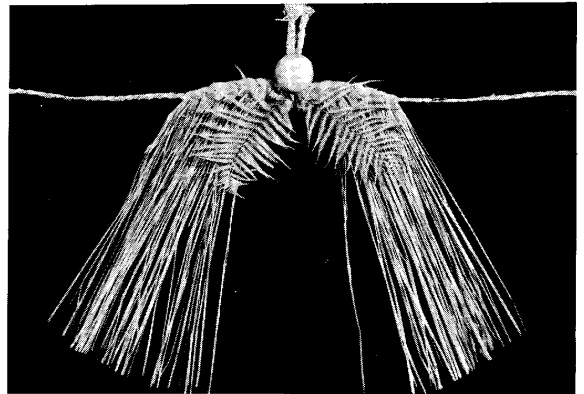
Fig15-b-3



熊本県 Fig17

5. 鹿児島県（一文字ジメ）Fig1-D

Fig18-a・bは鹿児島県の主流をなす注連縄である。二本の縄を中央でシメー文字に長い。この注連縄は九州で他に類をみない。また Fig19-a・bは鹿児島市内、新上橋で収集した。比較的古い様式とみるが特異なフォルムである。Fig20は同県北部阿久根の輪ジメである。写真のように稲穂付の見事なフォルムを有しているが、これは1974年に収集したものである。1976年に調査したが既にこの注連縄



鹿児島県※Fig18-a

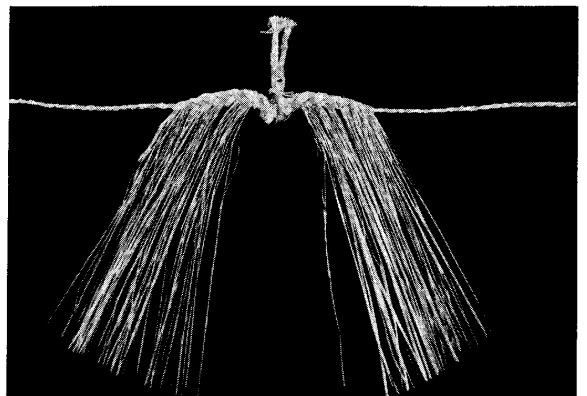
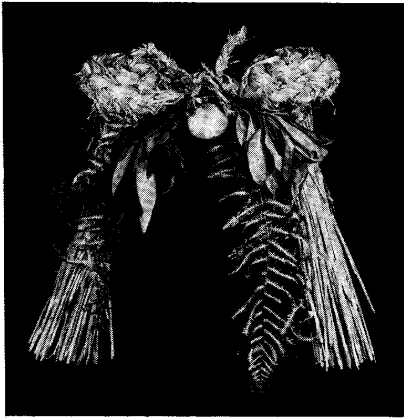


Fig18-b



鹿児島県 Fig19-a

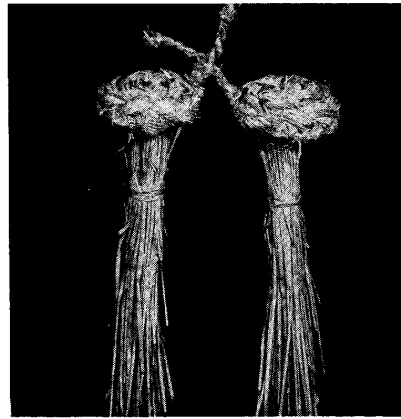
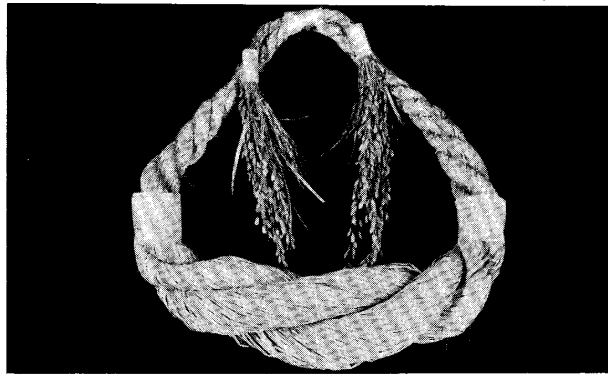
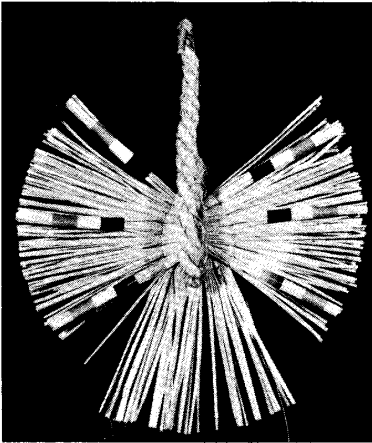


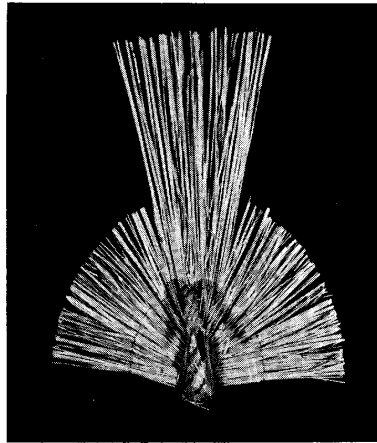
Fig19-b



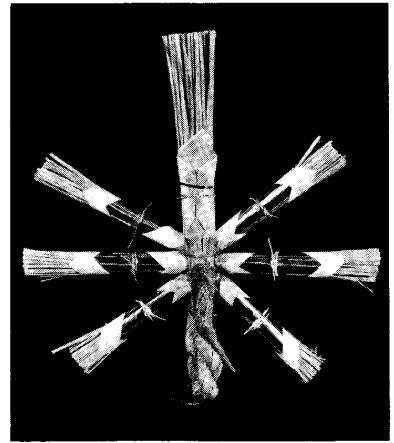
鹿児島県 Fig20



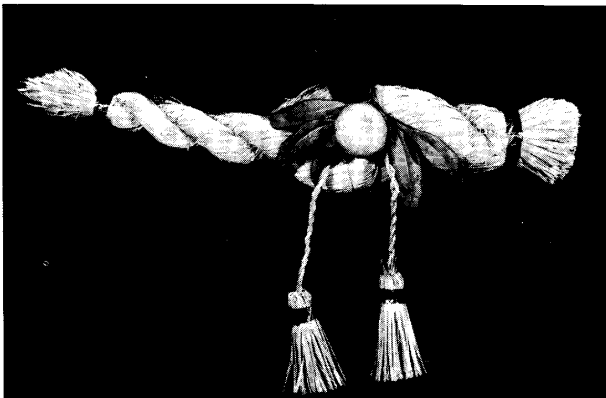
鹿児島県 Fig21



鹿児島県 Fig22



鹿児島県 Fig23



鹿児島県 Fig24-a

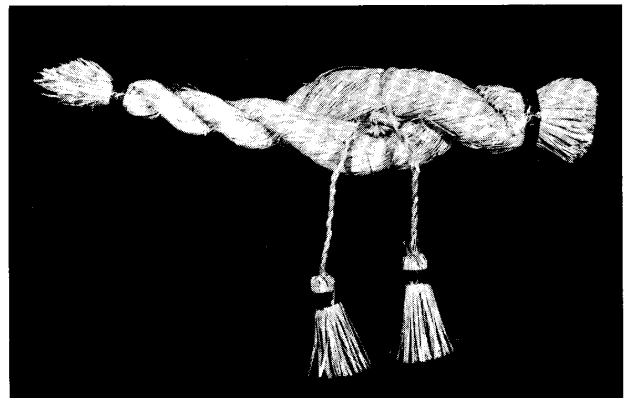
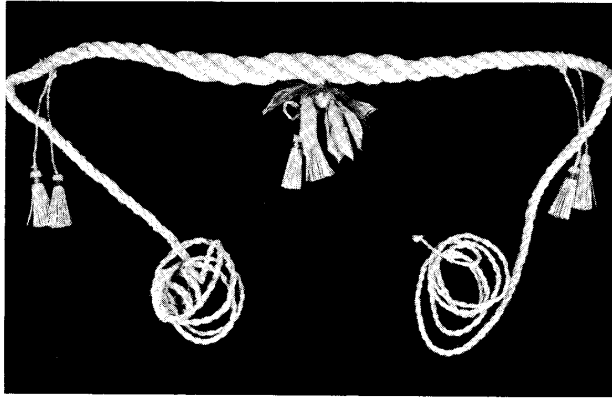


Fig24-b



鹿児島県 Fig25-a

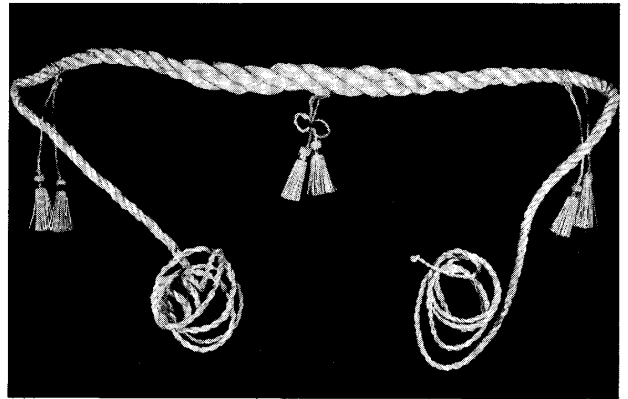
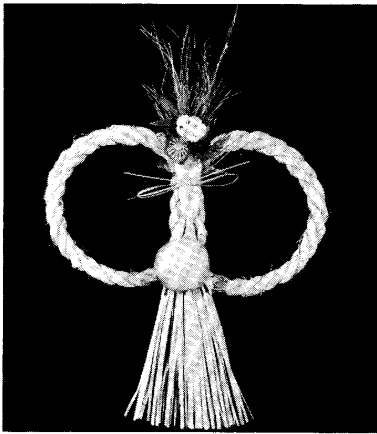
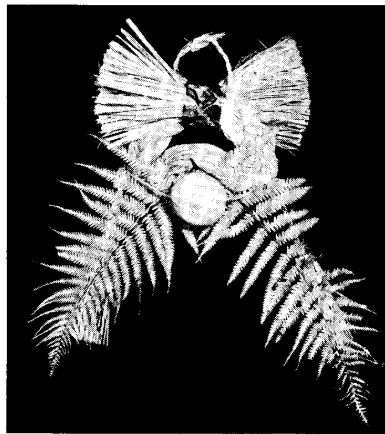


Fig25-b



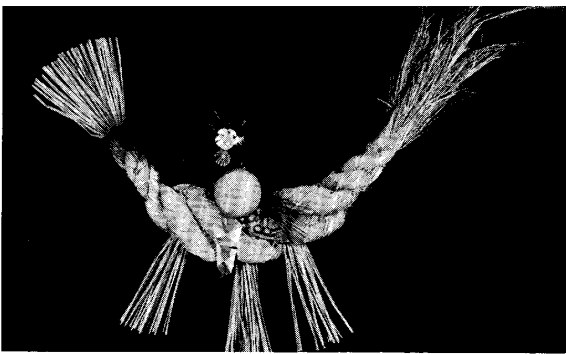
宮崎県 Fig26



宮崎県 Fig27-a



Fig27-b



宮崎県 Fig28-a

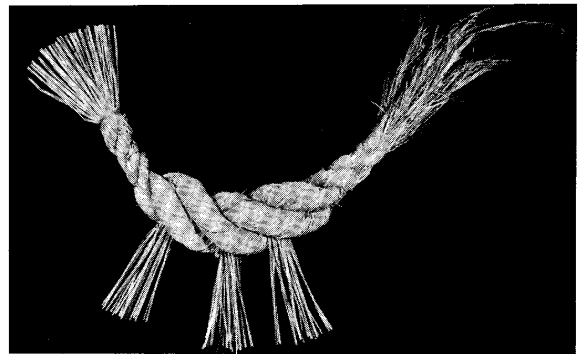


Fig28-b



宮崎県 Fig29-a

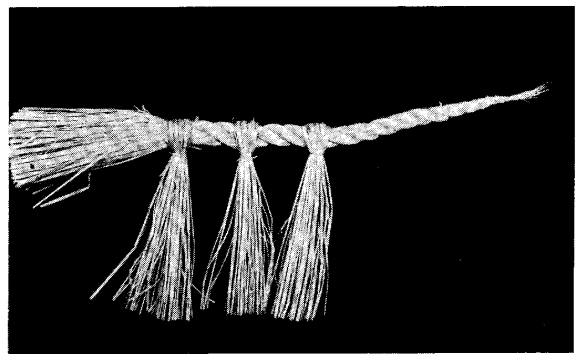
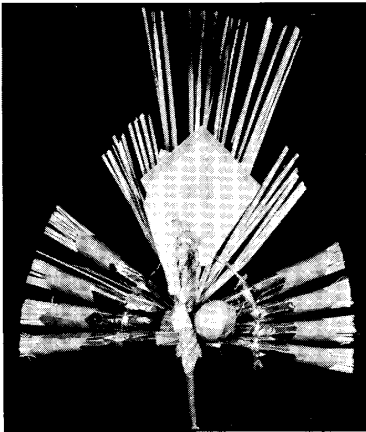
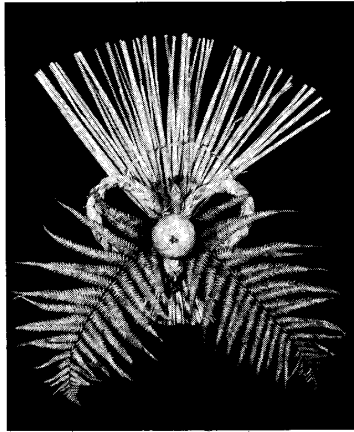


Fig29-b





宮崎県 Fig-30-a



宮崎県 Fig31-a

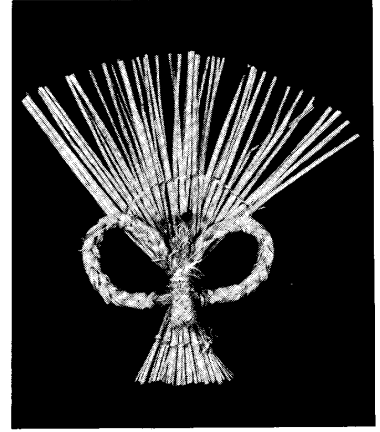
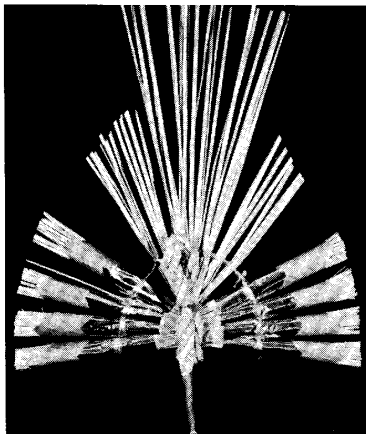
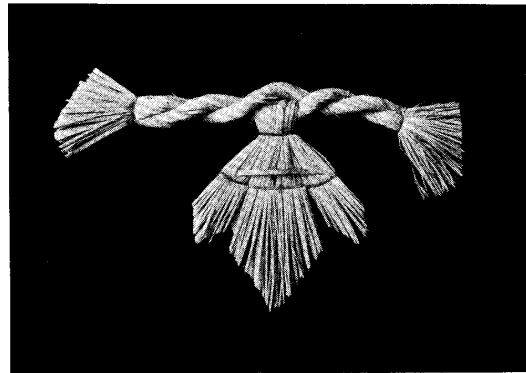


Fig31-b



宮崎県 Fig30-b



宮崎県 Fig32

は見る事が出来なかった。Fig21, Fig22は出水市米ノ津地方で収集したものであるが、この地方は鶴の渡来地で有名である。そのためかフォルムに鳥を連想するものがあり、様式としては板ジメであるが新しい様式とみた。Fig23は川内市のものである。Fig25-a・bは同県大隅半島中央部大隅町では古式の本飾りで用いられたと思われる長尺の注連繩を収集した。Fig24-a・bはこの地方ではめずらしく牛蒡ジメをみた。鹿児島県の飾りも裏白、だいだい、譲り葉である。

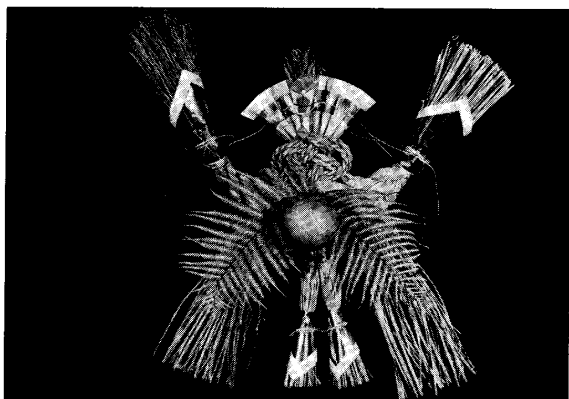
#### 6. 宮崎県 (輪ジメ・牛蒡ジメ) Fig1-E

Fig 26で示すように宮崎県は輪ジメである。しかし熊本県の様式とは別の形態である。同県都市の注連 Fig27-a・bも輪ジメの類であるがやはり形態に特色がみられる。Fig26の宮崎市内的ものは注連繩の上部に松竹梅の飾りがあり、形態が華奢である。宮崎市には Fig28-a・bのような牛蒡ジメの注連繩がある。力強いシメで美しいフォルムである。Fig29-a・bは宮崎県北部収集した牛蒡ジメ

であるが佐賀県、長崎県の様式と比較してシメの向きが左右逆向きである。Fig30-a・bは九州山脈の中心部五ヶ瀬町で収集した。Fig31-a・bは同県都市のものであるが、宮崎市内の輪ジメと比較すると扇状の四手が上部にあり少なからず形態が変化している。Fig32の注連繩は同じく都市で1975年に収集したものであるが、1976年の調査ではこれを見る事ができなかった。

#### 7. 大分県 (牛蒡ジメ) Fig1-F

大分県の注連繩の様式を牛蒡ジメとしたが、その様式のイメージは変容されて都会的な装飾性が強い。Fig33-aの形態が県内を統一している。Fig 33-b, Fig33-b-2, は日田地方の礎形であり、Fig 33-b-3は竹田地方で収集した。このように礎形だけを取り出してみると形態に数種のヴァリエーションをみる。Fig34-a・bは1976年大分市内で収集した注連繩であるが、この形態は大分では非常にめずらしく推察するに古い様式ではないと考えられる。制作場所不明。



大分県 Fig33-a

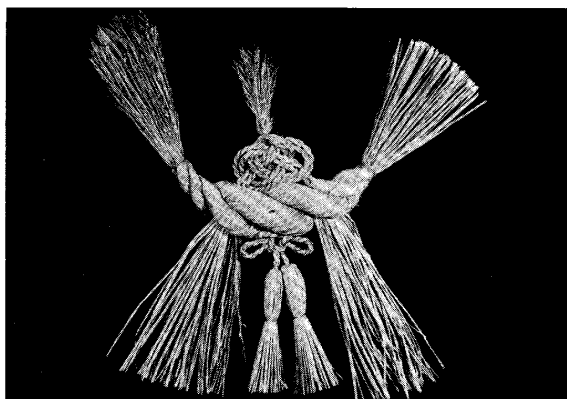


Fig33-b

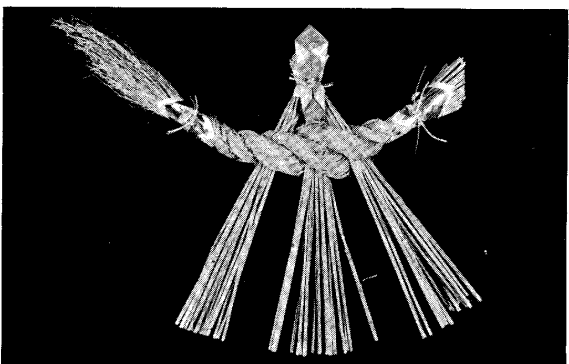


Fig33-b-2

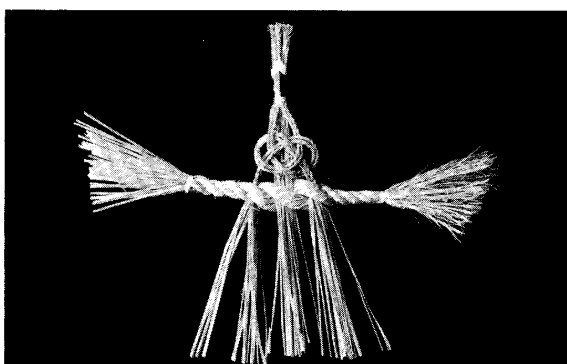


Fig33-b-3

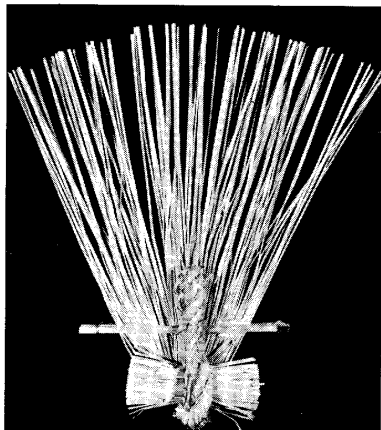
### ま と め

九州地方全域にわたっての注連繩にみる伝承形態の調査については、以上述べたとおりであるが、いうまでもなく、本研究発表の目的は、民族的立場からみた調査収集ではなく、あくまでもデザイン性に立脚して、各地方に伝承的に存在する注連繩に、その造形美を求めようとするものである。その目的に添って、調査収集を続行している裡ちにも、年々その伝承的注連繩の原型が、廃絶の様相を呈している現状をみる時、デザイン学的にも、この調査収集の重要かつ必要性を痛感せずには居れないものが在る。その点も併せてこの発表をまとめるべく努めていることを特記したい。

本調査研究により、当初の目的はかなりみたまされたと思われるが、今後は四国、本州、北海道の各地区についても、この調査研究を進め全国的視野のもとに注連繩の伝承形態美を明らかにして行きたい。

#### 〔注〕 参考文献

- (1) 日本民族学全集 4 藤沢衛彦著 P.522参照 高橋書院
  - (2) 日本の美術 3「伊勢と出雲」渡辺保忠著 P.110~111参照 平凡社
  - (3) 日本民族事典 大塚民俗学会編 P.326参照 弘文堂  
日本民族学全集 4 P.523参照 高橋書院
  - (4) 民族学事典 柳田国男著 P.263参照 民族研究  
年中行事事典 西角井正慶編 東京出版  
日本を知る事典 世界思想社  
柳田国男全集 第4巻 第7巻 第21巻 第24巻 筑摩書房  
" 第29巻 "
- 神と祭り日本人 牧田 茂著 講談社現代新書  
祭りの構造 倉林 正次著 日本放送出版協会



大分県 Fig34-a

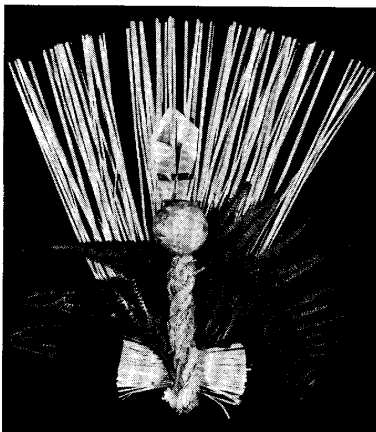


Fig34-b